

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 8 号

2015年3月

同 朋 大 学

はしがき

この要旨集は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、2014年度に本学において博士の学位を授与した者の「論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨」を収録したものである。

学位記番号に記した学位規則第3条第1項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏名	学位論文題目
文博甲第 13 号	博士（文学）	花 栄	親鸞思想の研究—唯識思想との関係性をめぐって—

氏名(本籍地)	花 栄(中華人民共和国)
学位の種類	博士(文学)〔同朋大学〕
学位記番号	文博甲第13号
学位授与月日	平成27年3月23日
学位授与の要件	同朋大学学位規定第3条第1項該当
学位論文の題目	親鸞思想の研究－唯識思想との関係性をめぐって－
論文審査委員	主査 本学特任教授 博士(文学) 尾畑文正 副査 本学特任教授 博士(文学) 中村 薫 副査 本学特任教授 菱木政晴 副査 大谷大学教授 博士(文学) 織田顕祐

14-8701 花 栄

「親鸞思想の研究－唯識思想との関係性をめぐって－」

内容の要旨

(構成)

序論

第一章 親鸞における救済の構造

第一節 親鸞教学の歴史的背景 —七高僧の思想との関係—

第一項 インドにおける展開

第二項 中国における展開

第三項 日本における展開

第四項 小結

第二節 親鸞教学における転成思想について

—唯識思想との関連性をめぐって—

第一項 問題の所在

第二項 親鸞における転成思想

第三項 「聞名」について

第四項 唯識思想における転依について

第五項 小結

第三節 親鸞の宗教体験としての三願転入

第一項 問題の所在

第二項 親鸞の三願転入の意義

第三項 小結

第二章 親鸞における信心の意義

第一節 信心の業識について

第一項 問題の所在

第二項 両重因縁積について

第三項 「信心の業識」における先行研究の検討

第四項 『観経疏』「序分義」における「自の業識」について

第五項 業識と『成唯識論』の阿頼耶識について

第六項 小結

第二節 『教行信証』における「三一問答」の普遍的意義

第一項 問題の所在

第二項 『教行信証』「信巻」における三一問題の意義

第三項 曾我の三心と三相について

第四項 金子の「本願三心の考察」から見る三心と三相

第五項 阿頼耶識の三相について

第六項 小結

第三章 親鸞の還相回向論

第一節 問題の所在

第二節 曇鸞の回向領解を求めて

第三節 還相回向と無住处涅槃

第四節 親鸞の還相回向観

第五節 小結

結論

(内容)

本論文は「親鸞思想の研究」に対して唯識思想を媒介にして論究する意欲的な論文である。更には外国人留学生として親鸞思想に対峙した論文であることも貴重であり、向後、こういう「親鸞思想」の研究が国際的になされることが求められている。本論文はサブタイトルにあげられているように「唯識思想との関係性をめぐって」論究したものであるので、第一章は「親鸞における救済の構造」ということで、その思想的背景を探ることが主題である。それ以下の章は全て、「唯識思想」との関係で考察している。以下、各章を概論したい。

第一章「親鸞教学の歴史的背景」においては、親鸞の「思想背景を成す七高僧の思想の

特徴を把握し、親鸞がその七高僧の思想をどう受け止め、今日の我々にどう伝えようとしたかを検討する。七高僧の生涯や思想の概略と親鸞の著書である『教行信証』「正信偈」を手掛かりに、親鸞思想の歴史的背景を考察することを試みるものである。更に、それらの思想を背景にして、親鸞がその独自の仏教理解を具体的にどう表現しているのかについての考察が、第一章、第二節からの展開である。先ず筆者が考える親鸞思想と唯識思想の関わりについてであるが、親鸞の転成思想と親鸞の宗教体験としての三願転入に注目して、それを解釈する。

先ず親鸞思想における転成思想は、「煩惱即菩提」という大乘思想が他力浄土門において新たに展開した思想である。親鸞において、「転成」の根拠は『教行信証』「総序」でいえば、「円融至徳の嘉号」である。それは、称名念仏によって自己の愚かさを知り、諸仏の称名を聞くことによって救われていくということを明らかにするものである。その不思議なはたらきこそは諸仏称名であり、衆生聞名である。それは親鸞自身が自ら体験したことである。他方、瑜伽行唯識思想では、世尊の真実の教えを正しく聞くことによって、その教えが阿頼耶識の中に熏習され、それが迷いの世界を清浄な世界へと転換させる。しかし、転換といっても、それは阿頼耶識においてであり、その身は悪のままの身でありながら阿頼耶識が清浄な世界へ転依するのである。親鸞の深い人間認識の根底には称名念仏があるが、それは瑜伽行唯識思想の説く「聞熏習」に通ずる「聞」の体験であると筆者は考えて、親鸞における転成思想の内実を「聞熏習」を参考にして考察する。

第三節の「三願転入」については、特に、親鸞の生涯に起こった重要な宗教体験であると捉え、それがそのまま親鸞の教学の独自性である三経、三願、三機、三往生の真仮の批判を中心にしたところに親鸞の三願転入の体験があることを確認し、その転入の時期について、先行論文を精査する中で、小谷信千代の説に同感して、その「転入」の時点は、三願の間にある真仮の関係を批判する論理が親鸞の中で確立することによって他力の念仏が確信された「今」に外ならないと考える。つまり親鸞の三願転入、特にその時期こそは、『教行信証』を書いているその「今」であることを確認して、親鸞自身の生涯において体験された宗教体験こそが本願力による他力行による回向であることを自覚し、その自覚において「真実の信心」を開かれたと考える論究である。

次の「第二章 親鸞における信心の意義」は、本論文のサブテーマに掲げた「唯識思想との関連性」をめぐる論究の先端になるものである。筆者は親鸞における信心の意義を考察するために、唯識思想と関連づけて検討することを試みる。論究点としては第一節に「信心の業識」と第二節に「三一問答」を取り上げる。第一節「信心の業識」では、「親鸞は「自の業識」を「信心の業識」と表わすことによって、自分の言うところの信心が、「如来よりたまわる信心」であることを明らかにしている。なぜ親鸞は「如来よりたまわりたる信心」を「信心の業識」として現わしたのか。それを筆者は『成唯識論』に説く阿頼耶識の四分義である「見分、相分、自証分、証自証分」の論理によって解釈することができると考えたのである。そこでは阿頼耶識は、見分としての転識、相分としての現識とならび、分別

意識の根源にはたらく自証分を現わすものとして解釈されている。そして信心の業識は自証分を証すものに相当すると考えられる。つまり信心を「信心の業識」と表現することにおいて、親鸞が言うところの信心が、大願業力の識であることを自証することができるものであることを考察している。

第二節『教行信証』「信巻」における「三一問答」の普遍的意義については、親鸞の「三一問答」は、周知の通り、本願の三心が論主の一心として成就していることが確認されるが、本節ではその信心を明らかにするために唯識思想を重ね合わせて考察するものである。世界は心の現われであると説く唯識思想と親鸞の思想を重ね合わせることによって、親鸞は自らが、迷いの世界を作り出す者であることを自覚して、その世界に生きる人間の心の闇を手放さないで、そこに身を据えて、如来の三心を究明した人であると筆者は、親鸞が唯識で取り上げる人間認識と同じように人間を深く捉えるところに、両者の思想の近似性を捉えて論究している。

唯識では心の根源に阿頼耶識があるからこそ私たちは迷い、そして迷いの世界から抜け出すことができないと説く。親鸞は自身を「罪悪深重の凡夫」と言い「愚禿釈親鸞」と言う。「三一問答」において親鸞は、念仏によって自己の愚かさを知ることを身をもって体験すること、そして如来の三心が我々の心の穢悪なることを反顕するものであることを明らかにし、そこに如来の大悲心が現行することを明らかにするのである。真宗における人間理解もはっきりしている。

最後に「第三章 親鸞の還相回向論」を論究する。曇鸞は世親の『浄土論』に説かれる「出第五門」を還相として捉えて、還相ということ「彼の土に生じ已りて、奢摩他毘婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かうなり」と明らかにしている。それは曇鸞の還相回向の根拠が世親の『浄土論』にあることを明示するものである。さらに曇鸞は「自利利他」の説明を検討し、「自利利他」の成就是阿弥陀の本願力によることを明らかにし、還相の意義を自利利他から解釈し、還相が阿弥陀の本願力によるものであることを明らかにする。このことを確認した上で、筆者は還相回向を瑜伽行唯識思想の無住处涅槃という視点から考察する。無住处涅槃とは、生死にも涅槃にも住せず、智慧ある無住处涅槃は、大悲をもって衆生界に生きるという、この無住处涅槃を論拠にして、曇鸞の還相回向を捉え、それが親鸞へと継承されたことを論究するものである。